

第5章 舞台美術

1 舞台美術業務について

【舞台面の美的表現の一つ】

舞台美術とは観客席から見える舞台の美術（装置）のことです。舞台美術は純粹芸術の絵画、彫刻のようにそれ自体として成立するものではなく、総合芸術である舞台芸術を構成する一要素です。戯曲の指定するある一つの環境・場面を創造し、演劇の他の要素（戯曲、演出、演技、照明、衣裳、音響効果等）との協力により一つの舞台芸術を形作ります。



平成2年11月公演『紅葉狩』舞台写真

【舞台美術の構成（大道具と小道具）】

舞台美術には大道具と小道具があります。端的に言えば、大道具は不動産、小道具は動産と分けることができます。例外はありますが、引越しの際に例えると、置いていく物は大道具、持っていく物が小道具といった認識です。

なお大道具、小道具という名称は、物そのものを指す場合とその物を管理・操作する職人の職種を指す場合とがあります。

【さまざまな大道具】

大道具の代表的なものは、城・寺・神社・屋敷・農家・町屋などの家屋（不動産）ですが、ほかにもさまざまな背景が大道具を構成しています。

【例】風景（海・山・野面^{のづら}）、庵、塀

竹藪、松の立木、桜・紅葉・菊などの造花類

燈籠、切り株、手水鉢^{ちょうずばち}、石地蔵

木戸、枝折り戸、陣門

月、雨、雪

暖簾、滝幕、波幕、道具幕などの小裂類

薄縁、地拵などの敷物類

所作舞台、雛壇、山台 etc.



松大木裏面（大道具）



手前の造花（小道具）・奥の菊（大道具）

桜・紅葉などの造花の中でも、芝居中に役者が一枝を折って手に持つことがあれば、その一枝は小道具の扱いになります。

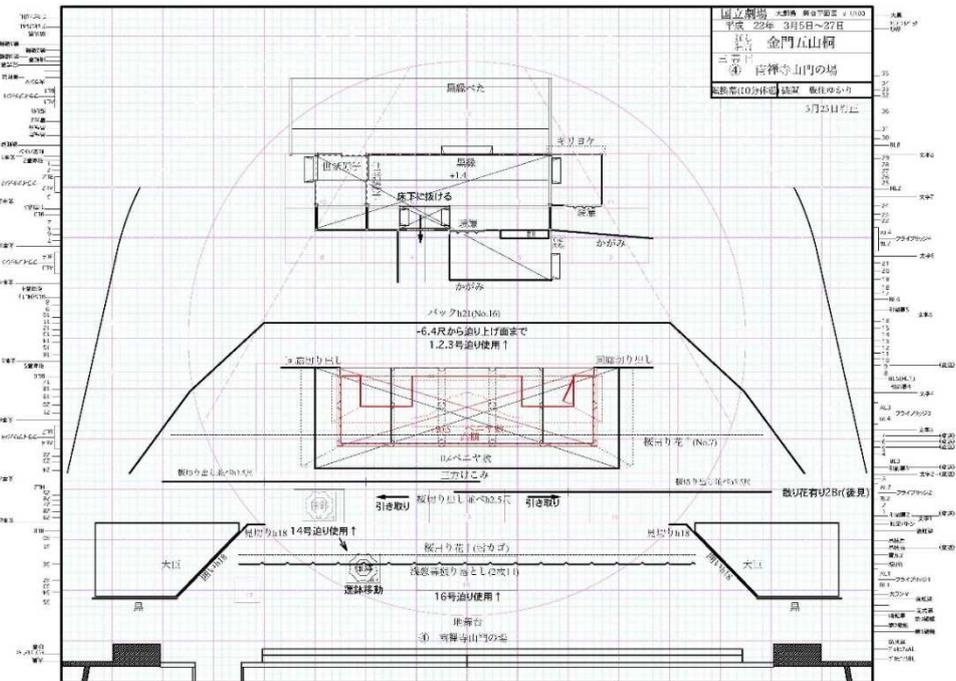
（1）舞台美術業務の流れ

舞台美術の仕事は、大道具のデザインが主体です。国立劇場・国立文楽劇場で行う主催公演（歌舞伎・文楽・舞踊・声明・雅楽・民俗芸能・琉球芸能などの伝統芸能公演・年間約 45 公演）及び貸劇場の公演においても技術協力の依頼がある場合は、大道具デザインに携わり、大道具の設計図にあたる道具帳どうぐちょうの描画と平面図の作成を行います。道具帳は絵の具を使って手作業で彩色し、平面図は CAD（コンピューターの設計システム）を使って作成します。

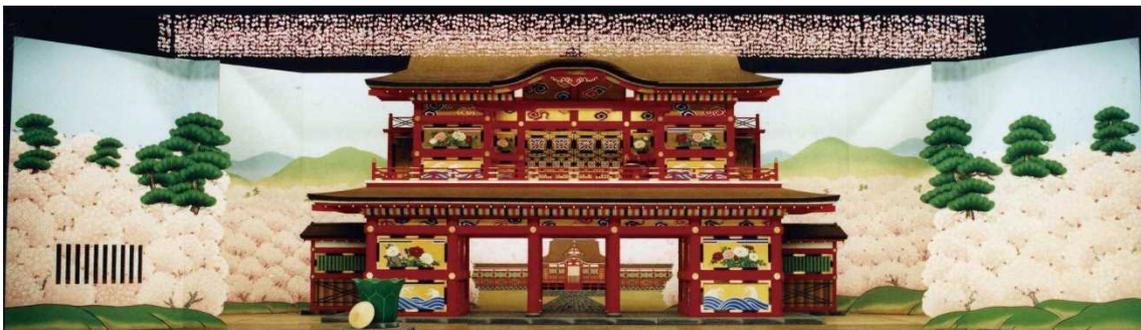


『きんもんごんのまり』「金門五山桐」南禅寺山門の場 道具帳

「道具帳」とは舞台を客席から見た時の大道具の絵面で、歌舞伎では縮尺 1/50、文楽では縮尺 1/40 で描きます。「平面図」は舞台を真上から見た時の大道具配置を記す図面で、縮尺 1/100 で書きます。



『金門五山桐』「南禅寺山門の場」平面図



平成 22 年 3 月『金門五山桐』「南禅寺山門の場」舞台写真

① 大道具のデザイン－歌舞伎の場合

〈公演約2カ月前〉

【資料収集】

過去の上演資料を集め、時代・風俗考証のための資料を集めます。

国立劇場の歌舞伎公演の特徴の一つに、復活狂言があります。例えば義太夫狂言の名場面といわれながら、戦後2回しか上演されなかった『伊賀越道中双六』^{い が ごえどうちゆうすごろく}「岡崎」^{やまだ}（山田幸兵衛住家）^{こうべい すみか}や、昭和6年以来86年ぶりに復活した『伊賀越道中双六』^{い が ごえどうちゆうすごろく}「円覚寺」^{えんがくじ}などは、古典歌舞伎と違い、過去の上演資料が乏しいため、さまざまな媒体（錦絵・ブロマイド・劇評など）を参照し、大道具プランに役立ちそうな資料を集めます。



新富座 明治45年「岡崎」(山田幸兵衛住家)
ブロマイド写真



「円覚寺」錦絵

【台本を読む】

台本から道具帳製作に必要な情報を読み取ります。

季節や時間・場面の背景をくみ取り、役者の登退場も確認します。しかし、歌舞伎の台本には場面の細かい指示はなく「定式の通り」「良き所に木戸を置く」など曖昧な表現が大半です。例えば下記台本に示す赤枠内が大道具に対する指示ですが、このような少ない情報でも「鶴ヶ岡社頭兜改めの場」の背景が問題なくできあがるのは、第一に古典歌舞伎の世界に継承される「型」及び「家」の思考、第二に数多くある約束事と歌舞伎特有の美意識に各技術者が精通し、それらを共有していることの2点によります。

大序 鶴ヶ岡社頭兜改めの場

本舞台三間の間、鶴ヶ岡八幡宮。段葛の石段。後ろ二ツ引の紋を染めたる幕を張りめぐらし、左右とも同じく白張り紋附きたる幕。石の玉垣。下手に銀杏の大樹。

二重舞台真中に足利直義、金烏帽子装束にて床几にかゝり、上手に高師直、立烏帽子大紋の形にて控える。平舞台下手に唐櫃を置き、その上手に塩治判官烏帽子大紋、下手に桃井若狭之助、同じく烏帽子大紋、その他烏帽子大紋の大名大勢、半素袍の雑式二人、仕丁数名、よろしく控え居る。

ト、この見得、吉例の通り天王立下り羽にて静かに幕開く。

ト、七五三の置鼓、「東西々々」の声七ツ、下手にてよろしくあつて、床の浄瑠璃になる。

〽嘉肴ありといえども食せざれば、その味わいを知らず

とは、国治まってよき武士の、忠も武勇も隠るゝに、例えば星の昼見え、夜は乱れて頭わるゝ、例しを

こゝに、仮名書きの、(東西声五ツ、中央) 太平の世の政事 (東西声三ツ、上手にかゝる)

〽頃は暦応元年如月下旬、足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事武蔵守高師直、御膝元に人を見下す権柄眼、御馳走の役人は桃井若狭之助安近、伯州の城主塩治判官高定。馬場先に幕打ち廻し、威儀を正して相詰むる。

『仮名手本忠臣蔵』「鶴ヶ岡社頭兜改めの場」台本

【企画会議】

制作、主演俳優の意図・希望を聞き、舞台美術の方向性を決めます。

歌舞伎の狂言は時代物、世話物、生世話物、新歌舞伎などカテゴリーに分かれており、大道具にもそれぞれの特徴が色濃く出ます。新作や復活狂言では、ほかの美的要素である衣裳・かつら・小道具と合わせるためにも、どのカテゴリーの狂言として扱うかについて共通の認識を持つことが重要です。

時代物の大道具は、金や朱色などを多用した様式美の集大成ですが、世話物・生世話物は庶民の生活の描写が多く、大道具も長屋や商家を写実に描写します。新歌舞伎はより写実で、新派の大道具に近い描き方をします。



『^{よしつおせんほんざくら}義経千本桜』^{かわつらほうげんやかた}「河連法眼館の場」

時代物の屋体は金や花丸の様式的な装飾を使い、衣裳の華やかさとともに極彩色の世界を作り出します。



『^{つゆこそでわかしはちじょう}梅雨小袖昔八丈』^{とみよちょうしんざうち}「富吉町新三内の場」

世話物の大道具は裏長屋の壁に「汚し」と言われる雨漏り跡のような描画を行い、粗末な雰囲気など江戸市井の暮らしをリアルに描き出します。



『^{げんろくちゅうしんざら}元禄忠臣蔵』^{おはまごてん}「御浜御殿」能舞台の背面

新歌舞伎の大道具はより描写が写実になり、樹木の描き方が洋画的になります。屋体の障子の向きについて実際の家屋と同じく^{さん}棧が部屋の方に向いています。

【平面図・道具帳の作成】

資料と台本を元に大道具デザインを進めます。

デザイナーによって手順は前後しますが、平面図上で役の動きを想像しながら、ラフスケッチを作成し、随時変更・加筆しながら道具帳を描きます。復活狂言のように定着した定式道具がない場合は、歌舞伎の約束事と美意識に注意しながら、一から道具帳を創造します。古典歌舞伎の定式の大道具でも、主演俳優の好みや工夫、家の型など、多少の違いがあります。その違いはあくまで基本的な枠組の中でのバリエーションであって、定式の枠を大きくはみ出すことはありませんが、基本的には公演ごとにその違いに配慮し、新規で道具帳を製作します。膨大な約束事や定式道具のバリエーションを頭に入れ、適材適所に使い分けることは、かなりの経験を必要とし、マニュアル化できない難しい部分です。



『仮名手本忠臣蔵』「大序 鎌倉鶴ヶ岡兜改めの場」江戸歌舞伎道具帳



『仮名手本忠臣蔵』「大序 鎌倉鶴ヶ岡兜改めの場」上方歌舞伎道具帳

上記は定式道具のバリエーションの例で、同じ「鶴ヶ岡社頭兜改めの場」でも江戸と上方では大道具が違います。上方歌舞伎には、文楽と共通する思考パターンが散見し、背景も文楽と似るところがあります。江戸歌舞伎より写実に表現しようとする欲求があるため、鎌倉鶴ヶ岡の社も実在の社に近くなります。対して江戸歌舞伎はどここの神社でも判を押したように同じような社が描かれます。遠近感のある回廊と遠見の社の組み合わせがパターンとなり、大きく逸脱することはあまりなく、いわゆる「定式道具」の代表格です。

〈公演約 1 カ月前〉

【俳優との打合わせ】

道具帳と平面図を俳優に確認してもらい、希望にそぐわない場合は訂正します。

【照明・舞台など他のスタッフとの打合わせ】

照明が当たりやすい位置に大道具の位置を調整するなど、照明係と場面の明かりの相談をします。大道具の内の小裂類・敷物類を管理している舞台係と共に、暖簾・^{じょうしき}上敷など場面にふさわしい品物を選別し、公演で使える状態か確認して、必要に応じて業者に発注します。また芝居で吊物機構、^{つりもの}迫り機構、廻り舞台を使用する場合も舞台係と手順を確認し、プランに無理がないか検討します。

【発注会議】

発注会議では、協力会社（大道具を製作する会社、大道具操作を行う会社、特殊美術を扱う会社）に対して必要な大道具の発注を行います。小道具の会社も同席し、大道具と小道具の釣り合いを協議し、ふさわしい物がなければ新規製作を依頼します。

打合わせ後に、協力会社から大道具の見積書とその根拠となる製作設計図面（書き抜き）が提出されますので、内容が適切かどうか査定し、舞台監督に伝えます。

〈公演約 1 週間前〉

【稽古場立ち会い】

読み合わせ～^{つけたて}附立～総ざらいとおおよそ3日～4日の稽古を見ながら、俳優の登退場の確認と大道具の変更・追加に対処します。

【道具調べ】

大道具を建て込み、舞台の所定の位置に飾り、不具合を点検します。場合によっては俳優も立ち会います。不具合がある場合は協力会社に直しや追加を指示し、舞台稽古で俳優が演技をする際の邪魔にならないように準備します。



左：仕掛けの調整

下：俳優の動線確認



『義経千本桜』「河連法眼館」の道具調べ

【舞台稽古】

必要があれば、前日にテクニカルリハーサルも行いますが、基本は2日間で2回の舞台稽古を行います。ここで初めて実際の大道具で俳優が芝居をするため、さまざまな変更、直し、追加の注文に対応します。例えば俳優の衣裳の模様と屋体の暖簾の模様が似てしまい、俳優が目立たないため暖簾を変更したり、^{ながばかま}長袴で歩く際滑りが悪く歩きにくいので、床の素材を変更したり、背景画の美的な出来不出来の確認だけでなく、多岐にわたる問題の対処にあたります。

〈初日以降〉

前日の舞台稽古で出た問題点を全て解決して、初日を迎えます。

通常2日目、3日目までには問題も出尽くしますので、公演が軌道に乗ったところで、舞台監督と舞台係に託し、美術係は舞台から離れます。

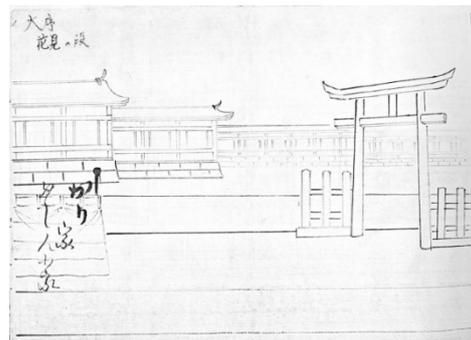
② 大道具のデザイン－文楽の場合

〈公演約2～4カ月前〉

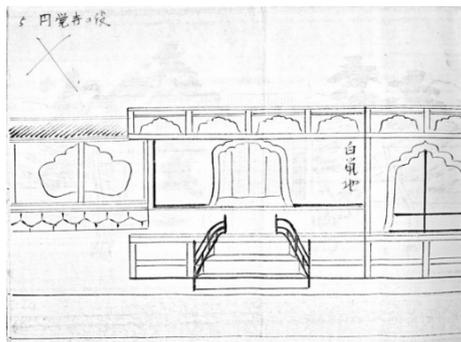
【資料収集】

過去の上演資料、時代・風俗考証のための資料を集めます。開場から55年以上が経った今では上演資料が蓄積し、視覚資料も充実しているため、プランの拠り所となる資料集めは比較的簡単になっています。しかし開場当初は「大新」や朝日座の^{だいしん}写真などから推測し、プランを立てていました。今でも新作・復活狂言がある時は、「大新」や朝日座の写真を参照することもあります。

大新『伊賀越道中双六』大道具絵



花見の段



円覚寺の段



郡山八幡宮の段

「大新」とは「文楽座 大二棟梁 新吉」が記した大道具絵（写真は明治30年代頃のもの）。現代の道具帳のように彩色はしておらず、墨書きの絵図。舞台美術デザイナーという職種が確立する前は、大道具の棟梁がどのような美術にするかの知識を持ち、決定し、簡単な絵を描いていました。

ゆかほん
【床本を読む】

床本から大道具製作に必要な背景を読み取ります。

歌舞伎の台本と違い、床本は義太夫節の詞章を書いた本のため、場面の説明を特記していません。義太夫節の所々の「頃は暦応元年二月下旬」「鶴が岡八幡宮御造営成就し」などの言葉を拾いだし、季節・時間・場所を特定して、情景を紡いでいきます。

大序 鶴が岡兜改めの段

嘉肴ありといへども食せざればその味を知らずとは、国治まつてよき武士の忠も武勇も隠るるに、たとへば星の昼見えず夜は乱れて現はるる
ためしをこゝに仮名書きの太平の代の政。頃は
暦応元年二月下旬。足利將軍尊氏公、新田義貞を討ち亡ぼし、京都に御所を構へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ御威勢。国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造営成就し御代参として御舎弟足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着なりければ
在鎌倉の執事高武蔵守師直、御膝元に人を見下ろす権柄眼
御馳走の役人は桃井播磨守が弟若狭助安近伯州の城主塩治判官高定。馬場先に幕打ち回し、威儀を正して相詰むる
直義公、仰せ出ださるゝは
「いかに師直。この唐櫃に入れ置きしは、兄尊氏に亡ぼされし新田義貞、後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄ての兜といひながらそのまゝにも打ち置かれず。当社の御蔵に納める条、その心得あるべしとの厳命なり」と宣へば
武蔵守承り
「これは思ひも寄らざる御事。新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名、清和源氏はいくらもある。奉納の儀と遠慮なく言上す
「イヤさやうにては候ふまじ。この若狭助が存ずるは、これはまつたく尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちもたらされ、御仁徳を感心し、攻めずして降参さする御方便と存じ奉れば、無用との御評議、卒爾なり」

『仮名手本忠臣蔵』「鶴が岡兜改めの段」床本

【美術打合わせ】

制作、人形遣いの意図・希望を聞き、舞台美術の方向性を決めていきます。

【平面図・道具帳の作成】

文楽の世界では、それぞれの演目で主役を務める人形遣い（主遣い）の意図が大道具に強く反映されます。歌舞伎のような「定式道具」も存在しますが、個々の好みや工夫も多く、公演のたびに新規で道具帳を製作します。歌舞伎との大きな違いは大道具の大きさで、人形が人間のおよそ7割～8割の大きさでできているため、建具や屋体も小さくデザインします。文楽特有の決まった寸法があり、それに当てはめてデザインしていきます。人形の首（人形の頭部）も小さいため、歌舞伎のようなダイナミックな様式美はそぐわない場合があります。控えめな模様や淡い色目など、人形が引き立つような配慮が必要となります。また人形浄瑠璃文楽は、大阪で生まれ、育まれた芸能のため関西を舞台にした演目が多く、関西地方の山並みや寺社への思い入れが強い傾向にあります。そのため背景の描写にもこだわり、例えば生駒山らしい山並み、天王寺までの距離感などの土地勘や馴染みがあるだけに、それらの表現には正確性を求められます。



『仮名手本忠臣蔵』「大序 鶴が岡兜改めの段」文楽道具帳

先に記した歌舞伎の道具帳のうち上方歌舞伎と似て、写實的に表現しようとする意図が文楽にはあります。文楽はさらに太夫が語る内容を尊重する傾向があり、例えば「頃は暦応元年二月下旬」の季節に合わせるべく紅葉した銀杏ではなく、若葉が茂った銀杏を描きます。対して歌舞伎は銀杏らしさ、様式美を追求し、鮮やかな黄色の葉が茂った銀杏の大木を置きます。

〈公演約1カ月前〉

【人形遣いとの打合わせ】

道具帳と平面図を主な人形遣いに確認してもらい、希望にそぐわない場合は訂正します。

【照明・舞台・小道具など他スタッフとの打合わせ】

照明・舞台は歌舞伎と同じですが、小道具は歌舞伎と違い、国立文楽劇場内部に担当係があり、大道具と小道具の釣り合いを協議し、演目にふさわしい物を一緒に選定します。

【発注会議】

協力会社（大道具を製作する会社及び大道具操作を行う会社）に対して必要な大道具等の発注を行います。

打合わせ後に協力会社から大道具の見積書とその根拠となる製作設計図面（書き抜き）が提出されますので、内容が適切かどうか査定し、舞台監督に伝えます。

〈公演3日前〉

【道具調べ】

舞台に大道具を飾り、不具合を点検し、照明を当てて、舞台稽古に備えます。

【舞台稽古】

必要があればテクニカルリハーサルも行いますが、基本は2日間の内にそれぞれの演目につき1回の舞台稽古を行いながら、芝居に合わない大道具の直しをします。文楽は稽古場での稽古もないため、事前の準備が重要となります。

〈初日以降〉

歌舞伎に同じ。

③ 大道具の公演資料の作成と保存管理

初日の後、上演時の大道具の詳細な記録を残します。

近年は、映像技術の発達で簡単に過去の公演を観ることができるようになっています。しかし映像記録は客席からの視点のため、次回の大道具製作には足りない情報があります。それらを補うため大道具の細部をいろいろな角度から写真に撮り、将来の公演に役立てています。道具帳はスキャンし、データと実物を残し、平面図には変更点、追加点の注意書きを加え、保存しています。

平成6年以降、公演資料のデジタル化が進んでおり、資料の検索・再利用がスムーズになり、道具帳作成の作業効率が格段に上がっています。



金門五三桐-下手から



金門五三桐-裏から



金門五三桐-上手から

正面だけでなく、脇や裏から撮影し、記録に残します。デザインの記録だけでなく、裏の様子は映像記録ではわからない俳優の動線の記録になります。

④ 外部舞台美術デザイナーとの調整

歌舞伎の演目の中には、作品と美術デザイナーがセットになっているものがあります。例えば『元禄忠臣蔵』の伊藤熹朔氏・中嶋八郎氏、『曾根崎心中』の長坂元弘氏、『御ご撰せん勸進帳』の鳥居清忠氏などです。

そのような演目を上演する際、国立劇場の美術係は、ほかのスタッフと外部美術デザイナーとの間に入り、各種調整・連絡役を担います。道具帳と平面図の作成は外部美術デザイナーが行いますが、発注会議の補助から稽古場、初日までの立ち会いは美術係が行います。

(2) 舞台美術スタッフ

舞台美術係の職員は5名です（令和4年6月現在）。1公演を1人が担当しますが、大きい公演はサブ担当をつける場合もあります。10月以降の歌舞伎公演は業務量がかかり多いのですが、基本的に1人で行います。

(3) 公演種別

① 主催公演

年間45公演程度（文楽劇場の公演を含む）です。

② 貸劇場公演

技術協力の依頼がある場合に携わり、年に3、4本程度です。

(4) 舞台美術業務の次世代への継承

大道具スタッフとコミュニケーションを取ることが、一番大事ですので、最初の1年は大劇場に6カ月、小劇場に6カ月、舞台課と一緒に舞台研修という形で定式道具や毛もう氈せんの準備など、基礎となることを覚えます。2年目で先輩職員の補佐について道具帳や平面図の描き方などを学び、3年目からは道具帳を描く作業を増やしていきます。まずは一つの場面から、やがて一つの公演全体を任せるようにします。例えば『素浄すじょう瑠璃るりの会』のように屏風と山台だけを用意する簡単な公演から始め、こうした短期公演を通じて舞台係、大道具、照明との連携をとることも覚えます。文楽の公演は道具帳を描く練習が数多くできるので、続いて文楽公演を担当、その後研修発表会や歌舞伎の鑑賞教室など場面数の少ない公演、そしてさらに大きな公演を担当して、さまざまなバリエーションを覚えていきます。

国立劇場は復活狂言や新作狂言があるのが特徴ですので、多くの引出しが求められ、一人前になるには、少なくとも10年くらいかかります。

2 舞台美術業務における安全対策

舞台美術係は演出面だけでなく、公演が安全に行われるよう、多方面に配慮したデザイン・設計を行っています。

例えば出演者の移動スペースが充分に取れるように大道具を配置したり、高所での演技が必要な場合、落下防止柵をデザインの一部分として組み込んだり、万が一落下した場合に備えて衝撃吸収マットを敷くためのスペースを設けたりします。また、転換の手順、時間に無理が無いようにスタッフの配置を考慮した設計をします。大道具に重量物がある場合、設置位置・重量など舞台機構に負荷がかからないように位置やデザインの調整をします。

以上のようにデザインの段階で考え得るリスクを避け、出演者・スタッフ・舞台機構の安全と舞台演出の両立を心がけています。